

トマト



雨よけマルチ栽培有効

—藤崎成博

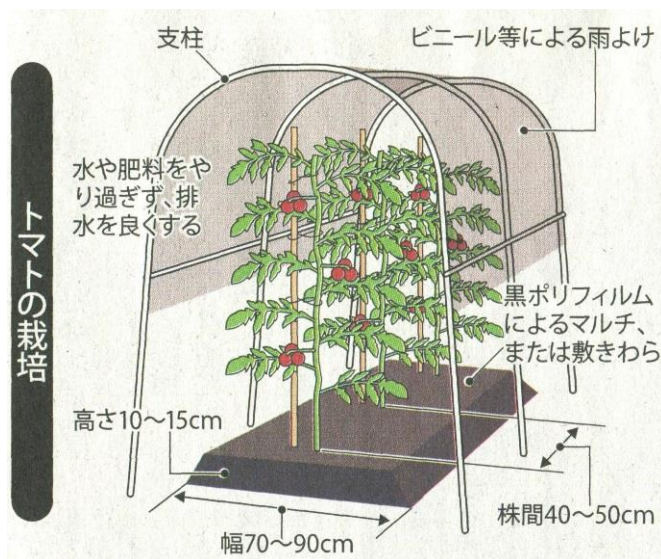
トマトはビタミンに富み、栄養価が高いことが知られます。また、トマトの赤い色はリコピンという色素があるからで、他にも機能性が高いカロテンも多く含みます。

トマトの原産地である南米のアンデス山脈は、きわめて雨の少ない地域です。これを反映してかトマトは雨が多いことをきらいます。そこで今回はビニール雨よけマルチ栽培でおいしいトマト作りを紹介します。

トマトの生育適温は15～25度で、4～5月が露地の植え付け適期です。日当たりが良く、排水の良いほ場を選びます。

トマトはカルシウムやマグネシウムなどの欠乏症や窒素成分の過剰症を起こしやすい野菜です。また、連作により土壌伝染性病害が発生しやすくなるので、**トマトを含むナス科（ナス、ピーマン、ジャガイモ等）以外の野菜の後作に作付けすることが望ましい**です。

苗は、自分で作った白根苗栽培も可能ですが、最近では市販の接ぎ木苗も簡単に入手できるようになっています。接ぎ木苗の利用で完全に土壌伝染性病害虫を防ぐことはできません。しかし、一つでも二つでも病害を防ぐことが可能であれば、農薬に頼ることが軽減されます。できるだけ大きめの鉢で育てられた苗を準備し、植え付けの目安として最初の花房が開花し始めたころに行います。



植え付けの2週間前までに苦土石灰（1平方メートル当たり100～200グラム）を全面に散布し、1週間前に堆肥（同3キログラム）と化学肥料（三要素8%の場合、同120グラム）を施し土とよく混ぜ、うねをたてます。

トマト作りでは、**水や肥料を多くやりすぎない、排水を良くするなど過繁茂にならないようにすることが重要**です。

植え付け時からの雨よけマルチ栽培は生育コントロールに有効で、果実の障害や病害の抑制に効果が高く、さらに甘くておいしい果実を収穫するのに有効です。植え付け前までに準備しておくことが望ましいです。ポリフィルムでのマルチが間に合

わない場合は、栽培途中にわらや枯れ草を敷くことで、乾燥や病害の原因となる泥はねを防ぐことができます。

栽培中は早く脇芽を欠き過繁茂にならないようにします。また、収穫が始まったころから月に1回程度、適量の追肥を行います。

夏秋どりは開花後50日前後で収穫です。赤く色づいてから、収穫すると甘くコクのあるおいしい完熟の果実がとれます。

(鹿児島県農業開発総合センター園芸作物部野菜研究室専門研究員)

平成26年4月10日(木) / 南日本新聞